零式戦闘機

柳田邦男

文春文庫

文春文庫 240—1

零式戦闘機 定価 400円

1980年4月25日 第1刷

著者 柳田邦男

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本 Printed in Japan

文春文庫

零式戦闘機

柳田邦男

文藝春秋

零式戰鬪機　目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

プロローグ　設計者との対話　9
一対六　18
試作命令　27
「自由にやれ」　38
過渡期の中で　47
決断の条件　58
時代の最尖端を　68
最初の壁　77
苦闘の連続　86
初飛行へ　96
墜落　106
失敗からの飛躍　115
発想の転換　124
部下を得る　133
〝大判断〟と〝小判断〟　142
スパイ騒ぎの中で　152
脱皮　159
指切断の重み　168
企業合併　176
手作りの集積　185
驚異の速度記録　192
センセイション　199

感涙 207
空戦実験 217
二〇三高地の心境 226
時速五百キロの要求 235
小刻み主義との訣別 244
「道は近きにあり」 253
平均年齢二十四歳 263
一所懸命 273
幸運な条件 282
常識を超える 293
灰緑色に光る機体 301
もう一つの飛躍 310
満身創痍の試験機体 319
横須賀への旅立ち 328
謎の空中分解 337
見落されていた盲点 347
完全への忍苦 354
全機撃墜 366
一千機の零戦を 376
深夜の試験室 384
日米開戦 395
あとがき 402
解説 佐貫亦男 409

零式戦闘機

プロローグ　設計者との対話

その座敷は、四谷に近い目立たぬ通りに門を構えた割烹料理屋の奥に用意されていた。昼下りで客がすくないためか、廊下はひっそりとしていた。

長い廊下の途中に、襖の開いた部屋があり、通りしなに何気なく視線を向けると、やわらかな秋の陽射しをあびた縁先に和服の女がポーズをつくって立っていた。雑誌のグラビアかポスターの写真を撮っているのだろう。庭の芝生にはカメラマンやディレクターらしい男たちがいて、モデルに何かを指示している様子がちらりと見えたが、その声も芝生や植え込みにしっとりと吸いこまれて、こちらまでは聞えなかった。

いちばん奥の部屋に通されると、ある飛行機設計者とのこの日のインタビューを仲介してくれた友人の雑誌編集者が先に来ていて、向うから先に「やあ」と言った。

「ここならゆっくり話を聞けそうだな」

と、私は閑静な場所を用意してくれた友人に礼をこめて言った。インタビューの相手はまだ見えていなかった。

その相手――ある飛行機設計者とは、日中戦争後期から太平洋戦争を通じて日本海軍の主力戦闘機だった三菱製「零式艦上戦闘機」（通称「零戦」または「ゼロ戦」）の設計主務者、堀越二郎氏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

であった。

戦後すでに三十年余り経ち、堀越氏の著書にある「明治三十六年生れ」という生年から数えると、氏はとうに古稀を過ぎて、齢七十二の筈であった。古稀とは杜甫の詩中の句「人生七十古来稀なり」に由来する呼び方だが、零戦の設計に関与したかつての三菱重工業名古屋航空機製作所のメンバーは、けっして「人生七十稀」ではなく、むしろ健在者の方が多く、とりわけ堀越氏は往時のことを、まるで昨日の事のように記憶していると、伝え聞いていた。

それだけに私は、堀越氏とのインタビューに期待をかけ、いろいろなことを聞き出したかった。

堀越氏のために用意された席に正対する位置にテーブルをはさんで坐ると、私は早速聞き書きのためのノートや資料などを鞄から取り出して用意をした。ノートの最初の頁には、質問項目をあらかじめびっしりとメモしておいたのだが、その自分のメモにもう一度目を通しながら、私は、零戦とは何であったのかを調べてみたいという気持を起こさせた新聞紙上での投書論争のことを、あらためて思い起こしていた。

――投書論争とは、その半年程前、読売新聞東京本社版の昭和五十年五月十日付朝刊「よみうり時事川柳」欄に、

〈ゼロ戦の心長髪族知らず〉

という一句が掲載されたことがきっかけだった。そして、〈ゼロ戦の心〉とはいったい何かという問題を論じる投書が同紙に殺到し、それらの投書が論争の形で紹介されたものであった。

この川柳は、南太平洋の激戦地だったラバウル沖から引き揚げられた零戦一機が、三十年ぶりに故国に帰り、東京・上野の国立科学博物館に展示された話題を詠んだものであった。作者は、

ビルマ戦線に参加したことのある七十歳のおとしよりで、作者の後日の投書によれば、川柳で言おうとしたのは、「ゼロ戦の一語は、日中、太平洋戦争全体を指す。人生の厳しさを知らないタレント気取りの若者にあの戦争の苦しさはわからないだろう」という意味であったという。

ところが、零戦の時代と現代の若者との断層の対置の仕方が、零戦の時代を賛美するような意味にも取れるところから、〈ゼロ戦の心〉の意味をめぐって様々な解釈と評価が生じたのだった。

「ゼロ戦の心は乗っていた人間の真剣な生き方だ」と考える十八歳の高校生がいたのに対し、「ゼロ戦は〝惨事の残物〟。戦争の悲惨さのほかに何が残っているのかを教えてほしい。私たちにとって戦争は、もはや教科書の上での一ページにすぎない」と主張する二十歳の学生もいた。

受け止め方の多様さは、戦後世代ばかりでなく、戦中派の中にも見られ、「純粋な愛と悟りの権化に対する表敬」（四十八歳）「青年の尊い生命を奪った反戦のシンボル」（五十五歳）といったぐあいに、零戦の残像は様々である。

これらの投書に見られた様々な意見は、〈ゼロ戦の心〉の評価の仕方では対立していても、それぞれに背中に背負った自らの人生の集約であったり、あるいは現代を生きる生き方の意思表示であったりする点では、共通の真摯さを持っており、その真摯さゆえに、それぞれに緊張感を持っている。

だからどの投書にも、私は強い興味をひかれたのだが、投書論争を読み進むうちに、この議論にはもう一つの共通項があることに気がつき、そのことが気になり出したのだった。共通項というのは、どの投書者も、〈ゼロ戦の心〉という言葉を、戦争の時代の国家的体験あるいは個人的体験を論じるための象徴あるいはキイ・ワードとして用いているという点である。

言い換えるならば、論争されたのは、戦争と平和の問題にからむ人生観についてであって、零戦とはいったい何だったのかという零戦そのものの中身では必ずしもなかったのである。

で、気になったというのは、一つの物事が何かの象徴として扱われると、その物事を表わす言葉がいつの間にか自己運動をはじめて、象徴としての言葉と実体との間に位相のずれが生じて来ることがすくなくないということであった。そのように象徴化された物事は、あるいは美化され、あるいは逆にトータルに否定されたりする。だから、象徴化された言葉をめぐる議論は、実体をはなれた価値観の相互提示に終りやすく、歴史の果実を手にしそこねてしまい勝ちである。川柳の一句に用いられた〈ゼロ戦の心〉という表現が投書の殺到を招くほど、零戦というものが世代を超えた関心の対象であるのなら、いったい零戦とは何であったのか。

私の関心は、象徴としての〈ゼロ戦の心〉ではなく、零戦そのものの中身をつかんでみたいという点に次第に絞られていた。もっとも零戦そのものの中身をつかむと言っても、容易ではない。いわゆる戦記の側からのアプローチでは、ほかの戦闘機や爆撃機の体験とどう違うのか、必ずしも明確ではなく、結局のところ戦闘あるいは戦争そのものの記録と変らなくなりそうである。一つの試みは、零戦というものを、純粋に兵器あるいは工業製品として抽出し、世界に抜きんでたと言われたそのような製品が生み出された条件を、従来あまり試みられなかった技術および技術者の側からのアプローチによって浮き彫りにすることはできないだろうか、それが可能ならば零戦とは何であったのかを明確につかむ道を切り開くことができるのではなかろうか、それによって、かえって、零戦を生み出さなければならなかった時代の特質、さらには戦争への傾斜の中での技術と技術者、といった問題を明らかにすることができるのではなかろうか――というのが私

の考えであった。

ノートを開いたまま、テーブルの茶に手をやったとき、「お客様がお見えでございます」という女の声がして襖が開いた。

堀越氏は、長身で背すじが伸びてい、眼鏡の奥におだやかな笑みを浮べて、こちらの挨拶にこたえた。

この日のインタビューは時間の余裕がゆったりしていたので、話はこの年の夏テレビで放映された、アメリカ側のフィルムによる零戦の記録映画の話題から雑談風にはじめられた。その映画は、太平洋戦争における零戦の命は短かったと述べ、戦争の後期ではアメリカ側は零戦を墜とすことを〝かも射ち〟とまで呼ぶようになったとコメントしていたが、堀越氏はそのような評価は一面的だと思うと言った。

「たしかに零戦は防弾装置が貧弱だったことは事実です。それは日本の飛行機すべてに共通する問題でした。燃料タンクに命中すると、一発で有効打になってしまうのですね。

これに対しアメリカは、戦争に突入するとすぐに防弾装置に力を入れた。なん層も張り合わせた厚いゴムでタンクの内張りを作り、そのゴムの層の真中には生ゴムを入れてあるので、銃弾が貫通しても、油で生ゴムが溶けて穴をふさいでしまうのです。日本軍も敗色が濃くなってから、防弾を考えるようになったが、十分なゴムもなければ接着剤も開発されていなかった」

堀越氏は、ほっそりとした背広姿と面長な顔の広い額に、往年の設計者の神経を感じさせるものを漂わせているが、低い声でとつとつと話す物静かな口調は、戦闘機の設計者というイメージ

からはほど遠い。

――アメリカ軍からライターとあだ名された飛行機もありましたですね。

「一式陸攻（海軍の主力爆撃機だったあの葉巻型をした双発の一式陸上攻撃機）のことです。爆撃機は敵の戦闘機に狙われたら被弾をまぬかれないから、行動の機敏な戦闘機に比べて、防弾は設計上優先順位の高い要求なのですが、一式陸攻ははじめその配慮がなかった。

しかし、戦闘機の場合はすこし事情が違う。戦闘性能を相手よりもよくし、パイロットの腕をみがくことによって、防弾の欠如をある程度補うことができる。とくに日本のように飛行機の性能を決定的に左右するエンジンの開発が遅れ、使用するエンジンの馬力が欧米先進国に比べていつも二、三十パーセントもすくないという条件の下で、飛行機の性能を相手よりもよくしようとすると、どうしても設計上の要求項目に厳しい優先順位をつけ、何かを犠牲にしなければならない」

――防弾の優先順位は低かったのですね。

「設計開始時の軍からの要求項目にはなかったのです。自らを守るより先に、敵機を攻めて撃ち墜とす、というのが戦闘機の基本的な考えだったのですね。防弾装置の分だけ重量を減らせば、運動性がよくなり、攻撃力も増すわけですから」

当時における軍用機開発の手順は、簡単に言うと、まず陸海軍の各航空本部が毎年それぞれに、現用機の欠陥や弱点、戦闘の教訓、飛行隊の意見、諸外国の軍用機の情報などをもとに、新機種に盛りこむべき性能――例えば上昇力、最高速度、航続力、旋回性能、兵装、エンジン等々の条件――を検討して、設計計画要求書というものをまとめる。今日の言葉で言えば、いわゆるＯＲ

（オペレーションズ・リサーチ）によって新商品に必要な項目（パラメータ）を選択決定し、注文の仕様書（スペック）を作る作業である。設計計画要求書は、軍機密扱いで民間会社各社に提示され、各社の設計者が要求書に盛られた新機種の基本方針を具体化するための努力をして、試作機を作る。この競争試作によってすぐれたものが開発されれば、制式機として採用され、量産に入る。このような軍用機開発の手順の中で、設計の基本方針を左右する最も重要な設計計画要求書に、零戦開発の頃には、防弾という発想は登場しなかったのだった。

堀越氏の話は続く。

「防弾装置の分だけ重量を減らせば、運動性がよくなり、攻撃力も増すわけですから、戦闘機の防弾をはぶくということは、攻撃力を強めるという積極的な意味を持っていると考えることもできるわけです。その意味で、零戦は一千馬力程度のエンジンをつけた戦闘機としては、後にも先にも例のない限界ぎりぎりの性能を開発したものだったのです。

しかし、それも一対一の空中戦なら有効だったのですが、アメリカが二千馬力のエンジンを備えたグラマンF6Fなどを開発して、大量に前線に投入し、零戦一機に対して二機でかかって来るという作戦を取りはじめたとき、防弾の欠如は致命的となった。そうなると、もはや零戦の性能の問題ではなく、生産力全体の問題、国力の問題になってしまった」

――例の〝かも射ち〟ですね。

「零戦は、実に五年間も殆どエンジン馬力が上がらず、交替機もないまま、最前線の戦闘任務につかされたのです。もちろん海軍も陸軍も様々な新機種の開発に取り組みましたが、あれもこれもの総花主義で、飛躍的な成果は得られなかった。これに対しアメリカは、二千馬力級の戦闘機

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com